Fourier 級数の性質

信号処理 - 講義 5

村田 昇

前回のおさらい

ベクトル空間・内積空間・Hilbert 空間

- ベクトル空間 線形演算について閉じた空間
- 内積空間 内積が定義されたベクトル空間
- Hilbert 空間 ノルムに関して完備な内積空間

Hilbert 空間の完全正規直交系

- 定理 可分な無限次元 Hilbert 空間には**可算個** の要素からなる完全正規直交系が存在する.
- ・ 定理 可分な無限次元 Hilbert 空間は l^2 空間と同型である.
- 定理 $\{\phi_k\}$ が $\mathfrak H$ の完全正規直交系のとき以下が成り立つ.

$$\forall u \in \mathcal{H} \Rightarrow u = \sum_{k} \langle u, \phi_k \rangle \phi_k$$

Fourier 級数展開

• 定理

 $f \in L^2(-\pi,\pi)$ は以下のように Fourier 級数展開される.

$$f(x) = \sum_{n = -\infty}^{\infty} \langle f, \phi_n \rangle \phi_n(x)$$

$$\phi_n(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}}e^{inx}, \ n = 0, \pm 1, \pm 2, \dots$$

内積は $f,g \in L^2(-\pi,\pi)$ に対して以下で定義する.

$$\langle f, g \rangle = \int_{-\pi}^{\pi} f(x) \overline{g(x)} dx$$

演習

練習問題

• 次の関数 $f \in L^2(-\pi,\pi)$ を Fourier 級数展開せよ.

$$f(x) = \begin{cases} 0, & x \le 0 \\ 1, & x > 0 \end{cases}$$

不連続点の性質

片側極限

定義

$$h > 0$$
 として
$$f(x-0) = \lim_{h \to 0} f(x-h)$$

$$f(x+0) = \lim_{h \to 0} f(x+h)$$

と書く. これを片側極限という.

不連続点

• 不連続関数

点 x において不連続な関数を考える

$$f(x{-}0) \neq f(x{+}0)$$

点 x 以外の近傍での有界性を仮定する

$$\sup_{0 < h < \delta} |f(x-h) - f(x-0)| < \infty$$

$$\sup_{0 < h < \delta} |f(x+h) - f(x+0)| < \infty$$

不連続点での評価

• 定理で評価した式

$$f_r(x) - f(x) = \int_{-\pi}^{\pi} P_r(y) \{ f(x - y) - f(x) \} dy$$
$$P_r(x) = \frac{1}{2\pi} \sum_{n = -\infty}^{\infty} r^{|n|} e^{inx}$$

P_r の性質

 P_r の積分は偶関数であることから以下が成り立つ.

$$\int_{-\infty}^{0} P_r(y)dy = \frac{1}{2}$$
$$\int_{0}^{\infty} P_r(y)dy = \frac{1}{2}$$

• 不連続点まわりでの評価

$$\begin{split} & \left| \int_{-\delta}^{\delta} P_r(y) \{ f(x-y) - f(x) \} dy \right| \\ & \leq \left| \int_{-\delta}^{0} P_r(y) \{ f(x-y) - f(x+0) \} dy \right| \\ & + \left| \int_{0}^{\delta} P_r(y) \{ f(x-y) - f(x-0) \} dy \right| \\ & \leq \frac{1}{2} \sup_{-\delta < y < 0} |f(x-y) - f(x+0)| \\ & + \frac{1}{2} \sup_{0 < y < \delta} |f(x-y) - f(x-0)| \\ & \to^{\delta \to 0} 0 \end{split}$$

• 不連続点の Fourier 級数展開

関数 f の Fourier 級数展開 \tilde{f} は

$$\tilde{f}(x) = \lim_{r \to 1} \int_{-\pi}^{\pi} P_r(y) f(x - y) dy = \frac{f(x - 0) + f(x + 0)}{2}$$

が成り立つので、fの不連続点での Fourier 級数展開は両側からの極限の平均値となる.

演習

練習問題

- 以下の間に答えよ
 - 以下の関数は x=0 で不連続となる. Fourier 級数での f(0) の値を求めよ.

$$f(x) = \begin{cases} 0, & x \le 0 \\ 1, & x > 0 \end{cases} \in L^2(-\pi, \pi)$$

係数の性質

畳み込み

定義

周期 2π をもつ関数 f と g の**畳み込み** (合成積; convolution) h を以下で定義される.

$$h(x) = \int_{-\pi}^{\pi} f(x - y)g(y)dy$$
$$= \int_{-\pi}^{\pi} f(y)g(x - y)dy$$
$$= f * g(x)$$

– 関数 f,g は周期 2π をもつことに注意して、変数変換 x-y=z を用いて 2 つの定義が同値であることを確認せよ

L^p ノルム

定義

関数 f の L^p ノルムを以下で定義する.

$$||f||_{L^p} = \left(\int_{\Omega} |f(x)|^p dx\right)^{1/p}$$

ただし Ω は定義域で、一般には $\mathbb R$ 上の適当な区間.

- 内積から自然に導かれたノルムは L^2 ノルムである

L^p 空間

定義

$$L^{p}(\Omega) = \left\{ f \left| \int_{\Omega} |f(x)|^{p} dx < \infty \right\} \right.$$
$$= \left\{ f \left| \|f\|_{L^{p}} < \infty \right\}$$

Riemann-Lebesgue の定理

定理

$$f \in L^1(-\pi,\pi)$$
 の Fourier 係数 $a_n = \langle f,\phi_n \rangle$ は
$$\lim_{n \to \pm \infty} a_n = 0$$

となる.

• 証明

 f_r の Fourier 係数を $a_n(r)$ と書くと

$$\begin{aligned} |a_n| &\leq |a_n - a_n(r)| + |a_n(r)| \\ &= |a_n - a_n(r)| + |a_n|r^{|n|} \\ &\leq \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \|f - P_r * f\|_{L^1} + \frac{1}{\sqrt{2\pi}} r^{|n|} \|f\|_{L^1} \end{aligned}$$

ただし*は畳み込みを表す.

ここで r を 1 に近くとれば第 1 項はいくらでも小さくすることができる.また |n| を十分大きくとれば第 2 項はいくらでも小さくなるので, $\lim_{n\to\pm\infty}a_n=0$ が示される.

(証明のつづき)

最後の不等号は以下を用いればよい。

$$|a_n| = \left| \int f(x) \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-inx} dx \right|$$

$$\leq \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int |f(x)e^{-inx}| dx$$

$$= \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int |f(x)| dx = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} ||f||_{L^1}$$

 $-L^1$ 関数であれば係数の存在が保証されることを示している

Riemann-Lebesgue の定理の応用

• Fourier 級数の項別微分

関数 f は区間 $[-\pi,\pi]$ で連続, $f(-\pi)=f(\pi)$, ほとんどいたるところで f' が存在し, $f'\in L^2\cap L^1$ であるとする. f,f' の Fourier 級数展開をそれぞれ以下で表す.

$$f(x) = \sum_{n} a_n \phi_n(x)$$
$$f'(x) = \sum_{n} b_n \phi_n(x)$$

f を項別に微分して a_n と b_n の間の以下の関係を得る.

$$b_n = in \cdot a_n$$

• 滑らかな関数の高周波成分

Riemann-Lebesgue の定理より $b_n \to 0$ $(n \to \infty)$ なので、 $a_n = o(1/n)$ (Landau の記号) となる。 すなわち微分できるくらい滑らかな関数は $n \to \infty$ において 1/n より速く a_n が小さくなる (高周波成分が減衰する).

関数の積とノルム

Hölder の不等式

定理

1/p + 1/q = 1, p, q > 0 とする. このとき

$$\left| \int_{\Omega} u(x)v(x)dx \right| \le \|u\|_{L^p} \|v\|_{L^q}$$

- Cauchy-Schwarz の不等式 (p=q=2) の一般化である
- 証明

対数関数の凸性と 1/p + 1/q = 1 から任意の a, b > 0 について

$$\log\left(\frac{a^p}{p} + \frac{b^q}{a}\right) \ge \frac{1}{p}\log a^p + \frac{1}{a}\log b^q = \log ab$$

が成り立つ.

- 凸性について曖昧な者は意味を確認せよ.
- (証明のつづき)

また対数関数の単調性から

$$\frac{a^p}{p} + \frac{b^q}{q} \ge ab$$

が成り立つ。したがって

$$\begin{aligned} &\frac{1}{\|u\|_{L^p}\|v\|_{L^q}} \left| \int u(x)v(x)dx \right| \le \int \frac{|u(x)|}{\|u\|_{L^p}} \frac{|v(x)|}{\|v\|_{L^q}} dx \\ &\le \frac{1}{p\|u\|_{L^p}^p} \int |u(x)|^p dx + \frac{1}{q\|v\|_{L^q}^q} \int |v(x)|^q dx \\ &= \frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1 \end{aligned}$$

畳み込みのノルム

• 定理

$$h(x) = \int_{-\pi}^{\pi} f(x - y)g(y)dy$$

とするとき

$$||h||_{L^p} \le ||g||_{L^1} ||f||_{L^p}$$

• 証明

が成り立つ.

(証明のつづき)

$$\begin{split} \|h\|_{L^p}^p &= \int |h(x)|^p dx \\ &\leq \|g\|_{L^1}^{\frac{p}{q}} \int \int |f(x-y)|^p |g(y)| dy dx \\ &= \|g\|_{L^1}^{\frac{p}{q}} \int |f(x-y)|^p dx \int |g(y)| dy \\ &= \|g\|_{L^1}^{\frac{p}{q}+1} \|f\|_{L^p}^p = \|g\|_{L^1}^{p_1} \|f\|_{L^p}^p \end{split}$$

畳み込みの Fourier 級数

係数の存在

先の定理において p=1 とすると

$$||h||_{L^1} \le ||f||_{L^1} ||g||_{L^1}$$

となり、 $f,g\in L^1(-\pi,\pi)$ なら $h\in L^1(-\pi,\pi)$ となる。このことから畳み込み h の Fourier 係数が存在することが保証される。

• 係数の関係

f,g,hの Fourier 係数をそれぞれ a_n,b_n,c_n とすると

$$c_n = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int h(x)e^{-inx}dx$$

$$= \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int \int f(x-y)g(y)dye^{-inx}dx$$

$$= \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int \int f(x-y)e^{-in(x-y)}g(y)e^{-iny}dxdy$$

$$= \sqrt{2\pi} \cdot \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int f(z)e^{-inz}dz \cdot \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int g(y)e^{-iny}dy$$

$$= \sqrt{2\pi}a_nb_n$$

という関係が成り立つ.

演習

練習問題

- 以下の間に答えよ.
 - 関数 f を

$$f(x) = \begin{cases} 0, & x \le 0 \\ 1, & x > 0 \end{cases} \in L^2(-\pi, \pi)$$

とするとき、畳み込み f * f を求めよ.

- 関数 f * f を Fourier 級数展開せよ.

今回のまとめ

- Fourier 級数の性質
 - Fourier 級数展開:

$$f(x) = \sum_{-\infty}^{\infty} \langle f, \phi_n \rangle \phi_n(x)$$

$$\phi_n(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}}e^{inx}, \ n = 0, \pm 1, \pm 2, \dots$$

- 不連続点での Foureir 級数の値は平均値
- 連続 (滑らか) な関数に高い周波数は含まれない (Riemann-Lebesgue の定理)
- 畳み込みの Fourier 係数は元の関数の係数の積に比例する